

「mirai キャンプ」の取り組み

— “プラットフォーム”によって紡ぎ出される豊かな学びと関係性—

千葉大学大学院教育学研究科修士2年/mirai キャンプ実行委員会 代表 三宅中

1. 「mirai キャンプ」概要

千葉大学生を中心に実行委員会を組織し、①2011年12月24～28日、②2012年8月7～11日(4泊5日間)、福島県・千葉県千葉市の小学生を参加者に迎えてプログラムを実施した。

【目的】第一には、東日本大震災を受け、福島県と千葉市という広く見れば相互に関係しあう二地域の小学生を対象に、転地療養を目的とする。第二には、震災を超えて普遍的に必要なとされる、社会づくりの環境としての社会教育プログラムとして、価値多元社会や定常型社会の中で諸個人や共同体両者がよりよく存在できるように自己や他者と関わる力を育む目的がある。

【方法】このキャンプでは、「社会を知って力に変える」というスローガンの下、多様な専門家によるワークショップやレクリエーションなどのプログラムと共同生活を行う。特に、自己理解や他者理解および社会的理解の促進を目指す上で、“社会の縮図”あるいは“社会的コミット（を行っている者たち）の実践共同体”とも言えるような世代・領域横断的なメンバー構成という環境づくりが私達の中心的なアプローチとなっている。

2. 復興支援と教育

2011年夏季あたりから子どもたちを中心として「一時避難」だけでは解消しきれないニーズがあることを、他の実践での具体的な姿などを通して認識するようになった。今後いかに生きていくべきか、いかに生きていけるのか、について考えるよりよい場を彼らは必要としていると私たちは認識するようになった。また私達には、震災というテーマに関する問題が単独で存在するのではなく、もちろんオリジナルな問題もあるが、これまでの社会に潜在的に生じていた問題も多く含まれているように見えた。

私達の中心的な問題関心とは、第一に、子どもたちにとっての「学習の意義」の自明性の低下¹—何のために学ぶのかといった根源的な問いに各自が真剣に向き合わざるを得ない状況—といった問題であり、個人ベースの既存の枠組みでは対応しきれないのではないかということである。第二には、個人を伸ばすか、あるいは共同体を伸ばすかというこれまでの二者択一の枠組みではなく、両者の関係をつぶさに認めながら個人も共同体も伸ばすという新たな枠組みが重要だということである。

震災直後にすぐに支援活動に動き出したというよりは、復興支援をこれまでの社会的な問題意識の中に位置付け直すという自己解釈の時間を経て、一つの「社会づくり」の場としての「mirai キャンプ」を紡ぎ出し、復興支援活動に携わるようになった。

¹ 震災による津波被害や原発関連事故などによって、これまで安全だと言われ続けた根拠としての“科学”の“神話性”が崩壊した。ゆえに、学校で学ぶことの根源的な問い直しが生じてくる。福島の小学校教員の友人は、『行政サイドから「震災の影響で他県に学力テストで負けるのは悔しいから成績を上げろ。」と言われる。でも「このどうしようもない状況で勉強って言われてもピンとこない…」という子どもたちに対して、「とにかく成績を上げろ」「とにかく勉強しろ」とは言えない。』と私に話した(2011年5月)。

3. 「スティグマ」の緩和（できれば防止）と“修復的”活動として

「スティグマ」とは、他者や社会集団によって個人に押し付けられた負の烙印のことである。3. 1. 以後、福島の子どもたちは「フクシマ」の子どもたちとなっている。それは社会的にもそう扱われている面もあるし、自分達自身でもそのように自らを位置づけざるを得ない状況にある。

狭義での復興支援を考えるならば福島の子どもたちを中心に集めてケアを行うだろう。しかしこの「スティグマ」を考えるなら、それができるだけ緩和されるアプローチを行いたかった。私達のアプローチは、異なる地域の同年齢の子どもたちや幅広い世代の市民集団と共に何がしらの活動を行うことによって彼らへのケアに繋がることを目指した。また、これは単に「スティグマ」の緩和というネガティブなアプローチではなく、広く見れば相互に関係し合う者たちによる“修復的”活動という倫理的意味においてはポジティブなアプローチとも言える。これらの意味で当実践は広義の復興支援活動と私達は考えている。

4. 既存の社会構造を組みかえていくという意味での“social”を

今日では、「座学から実践的学びへの転換」や「活用の学力」あるいは「キャリア教育」・「シティズンシップ教育」などの21世紀型の教育観が導入され、それらのテーマの重要性は大方共有されてきている。しかし実際は、知識重視型の選抜システムや日本特有の同質的な関係性という学校文化によって授業形態の変化とまでは及んでいないように見える。

そこでは上述した新しい教育観に含まれていないはずの“social”という部分が、現存する社会構造を前提とした知識習得へと置き替えられてしまう。現存する社会構造自体を捉えて自らで組みかえていくような意味での“social”への転換が必要だと考えられる。そのために私達のキャンプでは、それぞれが社会づくりの様々なアプローチを見つけられることを最終目標とし、ワークショップでは、子どもたちは各講師から様々なアプローチのプレゼンテーションを受けて、それらを体験し、吟味している。この過程を通して、現存する社会構造を捉え、新たなあり方を協働的關係の中で考察していく姿が少しずつ見えてきた。

5. コミュニケーション能力・問題解決能力の形成

今日の社会では、読み書き計算などの測定しやすい学力に加えて、コミュニケーション能力や問題解決能力などの測定しにくい学力が求められている。前者については階層間不平等が広く知られているが、後者は前者以上に階層間の不平等が大きいと近年の研究によって明らかにされている。両者が相まって人々の社会的地位配分を水路づけている。

後者の学力（能力）はその形成方法も明確化されていない。努力をひたすら投入すればよいというものでもないからだ。これらの能力形成を社会的に行おうとするが、それだけを取り出して形成しようとするため多くが失敗に終わっている。

そこで私達は徒弟制研究に着目した。徒弟制では、親方を中心とする実践共同体の中で、実践的技能の習得を通して、技能だけでなくコミュニケーション能力や一人前としての社会的アイデンティティが緩やかに形成されるという。私達は実践を通してこうした能力の緩やかな形成を目指し、「超短期的弟子入り」という意味でワークショップをいくつか開発した。その道のプロを“親方”として招き、社会と関わり方やそこに込められた思いや考え方についての紹介・体験・吟味というプロセスをプログラム化した。

また当実践では、「自立と相互貢献」というテーマを掲げた“共同生活”も、上述の关系的な諸能力形成へのもう一つの重要なアプローチである。共同生活では基本的にルールを何一つ設けていない。「スタッフも子どももみんな同じキャンプの参加者として楽しくすごせるように」というようなポジティブルールを4つ“おきて”として設定し、何か問題が生じればそこに立ち返って、問題を試行錯誤して修復していくことを大切にされた。互いに衝突したり、うまく気持ちが向かなかつたりするような場面もあったが、子どもたち自身が、「こうしたい」「こうありたい」と思うことについて、自己解釈や、実現のための試行錯誤を共に進めていき、最後にはこれらの経験をポジティブに意味づけ直す姿が見られた。

6. 表出する地域や社会への思い

当実践では、こちら側から震災や原発のことには触れないスタンスをとった。なぜなら、生活世界に寄り添うプログラムでは各人の必要に応じて、自ら自由に語り出すと考えたからである。地域の自分にとって大切なところを紹介する「地域紹介」プログラム、自分がどのような国に住みたいかを色彩で旗に表現するワークショップ、福島と千葉に別れて地域の具体的な内容を議論したり、将来を構想したりする「mirai サミット」などのプログラム、そして日常会話の中でも、地域や社会に対する思いが表出するような場面は少なくなかった。内容としては、原発事故に対する不安や怒り、自然などの郷土の風土の大切さ、家族や友人や周りの人たちの関係性の大切さに言及するものがあった。

こうした表出した思いについては、まず“聞くこと”を大切にしていた。大切にしていたというよりも、話し手の真剣な表情や言葉に圧倒され、ハッとさせられ、引きつけられていたといった面も大きい。その場で解決できない大きくて複雑なことであっても、思いや問題を共有することはとても大きな意味を持つと感じた。話し手は、聞いてもらえて、みんなが他人事ではなく自分たちのこととして共有してくれる経験をするができる。聞き手は、今まで知らなかったことを知るようになる。それでこれまでを反省することもできるし、これから自分ができること、自分がしたいことを考えるきっかけを得ることができる。その場で解決こそできないが、共有することで、お互いが救われたり、前に進める気がしてくるようになった。

キャンプ後に、千葉の子どもたちが福島のことに関心を持ったり、勉強したりするようになったという報告を聞いている。意識が変わって新たに活動を始めるスタッフもいた。つまり、表出する地域や社会への思いの共有が、キャンプ後のそれぞれの変化へのきっかけとなっている。

7. プラットフォームの成果～子どもたち・スタッフの学び合い～

子どもたちに対するキャンプの事後アンケートでは、「こうなりたいと思う人が一人以上いた」という項目を全員が支持した。「こうなりたい」という対象ができたことは、これから生きる上で大きな道しるべになるだろう。今では、子どもたち同士、スタッフと子どもたち、スタッフ同士で連絡を取り合ったりするなどこれからのつながる関係性が構築されている。

また、スタッフ集団の中では様々な領域からメンバーが集まってきていることから、プログラムを実施するスタイルや考え方の多様性が増加し、それぞれがたくさんの新しい視点を得た。スタッフの地域性も広がり、年齢構成の上でも3歳から60代までの幅広い集団となった。それゆえ子どもたち・スタッフ両者にとって参照できる対象が広がることで、実践に対する葛藤や諸問題が多面的な関係性の中で循環的に解消されているようだった。

このように領域や世代の幅広さという集団のもつ豊かさによって、子ども・スタッフに関係なく、より豊かな学びにつながる関わり合いが生まれた。この姿はみんなが関わり合う中で相互に豊かになって

いくという“社会”の姿そのものであり、社会の縮図を mirai キャンプ内に作れている。ここに多くの方々が関心と協力を寄せてくれるという意味で、これが一つの“プラットフォーム”として機能していると自覚するようになった。

さらに、この場は実行委員会に所属する私達若者にとっての大きなキャリア形成の場にもなっている。このような社会的活動の一つ運営・実施することは容易ではない。だからこそ、自らの大学での専攻特有の知識や技術、自らの経験やネットワークなどをチームの中でどのように活用可能なかを真剣に考える。こうして、ある目的を共有し協働する過程で、自らの専門性や役割が明確化し、領域や世代横断的に協働することの意義について理解していく。若者は社会貢献活動の運営を通じて、自らの学びや関係性などを獲得しているのだ。ここから、復興支援活動が双方向的な関係性から成り立つことがわかってくる。

8. 活動から見えてきたもの

当実践を企画して 2 回開催することには相当な時間と労力が必要なため大変だったが、取り組んできたことに後悔はない。なぜなら自らの専門性をもとに、社会に出て、具体的なプロジェクトとして形にして、フィードバックを受けることができたからである。また、被災地の人たちに触れて、関わり合いを持てたからである。

活動を通して復興支援について考えさせられた。心の復興として、まずはリフレッシュ、次にそれだけでは解消しきれない根源的な問いに向き合うことが大切であり、さらに今後はその問いへの答えを実現していく、こういったプロセスが大切だと考えるようになった。また、復興をめぐる社会的文脈も常に変化しており、これからは震災固有の問題の特定と解決と同時に、復興支援を超えた普遍的な枠組みからの支援が望まれるだろう。

しかし、実際にプロジェクトを運営するには労力やコストが相当かかるゆえ、継続の困難性という問題にぶつかる。それでも様々なアクターができる範囲やタイミングで、様々な形でアプローチしていくことが、多様で、常に変化していくニーズへの現実的な対応につながる。各プロジェクトの継続に対する幅広い支援がもっとあると心強い。

私たちは資金ゼロから学生を中心に活動を始めたが、運営の大変さを克服していくことで、単なる“キャンプ”以上のことを経験し、学ぶことができた。良いキャリア形成の場となったと私は感じている。しかしながら、それは常に信じられないドラマティックなものを含んでいるし、同時に面倒な事務仕事などのくだらないものも含まれており、モチベーションの維持や、学業との両立は簡単ではない。しかし、こういった活動が、社会や大学や学生などに受け入れ可能なものとして積極的に認識されていくように今後も周囲の団体と協働して取り組んでいきたい。

9. 主な参考文献

- ・三宅中、宗川拓矢、山本真大（2011）「社会貢献活動としての『mirai キャンプ』」『第9回日本教育保健学会講演集』
- ・三宅中（2012）「福島×千葉×大学生×市民という「mirai キャンプ」」『PATIO 第38号』千葉県高等学校教職員組合東葛支部・松戸支部 PATIO 編集委員会
- ・mirai キャンプ 2011 web サイト www.geocities.jp/miraicamp2011/
- ・mirai キャンプ 2012 web サイト www.geocities.jp/miraicamp2012/